

旗の繩の沖



平 康 村 松

一九五五年の正月を、日本は、そして沖繩は、どのように迎えるでしょうか。

私が、八重山の先生がたと別れてから、二カ月。その間に、教育長の更迭した知らせを受けました。私より一年前に、石三次郎先生が行かれたときは、教職員組合が、「日本復帰」の旗じるしをかかげ、活ばつな動きをしていたとのこと。ところが、私の滞在中に、教職員組合が解散して、教職員会となり「日本復帰」をとなえることは出来なくなり「日本復帰」の提唱は、政治的発言

であり、教員のなすべからざるものという見解がとられたからです。

八月の教職員大会で、教職員組合が教職員会に切りかえられ、「日本復帰」の旗じるしをおろすことになるうとしたとき、「若し仮りに私がここで反対をとなえた場合、その発言を十分に討議し得るか、又、こうした発言をした後で私の教員としての地位が危くされるようなことはないか。地位の保障がなければ、意見を述べることはできない、と言った教員がいました。発言をとらえて、やめさせられるかも知れない。どこで誰がきいているか。危い。うっかりできないといった気持が多くなると抱かれていたように思われれます。

「日本復帰」をとなえることは、アメリカに、好意をもって受けいれられていないようでした。沖繩、いまの琉球には、民主党と社大党と人民党があります。上からこの順にアメリカとの関係はよいのです。「日本復帰」「民族的結合」は、あとの二つの党が説えるところ。アメリカには、「日本復帰」を説える人たちのどれが、共産党系の人たちであり、またどれが、アメリカに好意をもては

するがそれ以上に日本を愛している人たちであるかの「けじめ」が、つきかねているようでした。この「けじめ」をつけようとして、あやまちを犯すよりは、明かに同調者だと思われれる以外のものを、一様に疑い、気を許さぬほうが安全だと感じられているのかも知れません。しかし、この気持を強く出すと、共産党系でない人もひっくるめてそう扱ったりそう扱われていると思う人たちをつくります。自分ではそうだと思っていない人に、そうだと言いつつ切ってしまった場合、この結果はどういうことになるでしょうか。

私は、しかしここで、殊更にアメリカのやり方を批判しようと思っているのではありません。アメリカ流の善意が、必ずしも浸透していないことを、明かにしようと思つていなくてもありません。私は、何々使節団の一員としていつたのでも、年輩の有名人としておもむいたのでもなく、琉球派遣講師の一人として、六週間にわたって、「児童心理」を担当し、八重山の主に若い先生たちと接する機会をもち、一しょに研究を進め生活をしてきましたので、内心の叫びや突込んだ気持を知ることができましたけれど、それを手掛りと

してここで政治的意見を述べるつもりはないのです。

ここで私が述べたいのは、昨年よりは今年今年よりは明年というように、「日本復帰」の声は、きこえなくなるかも知れない。けれど、事情が事情だからだ。その声が、或いは段々にきこえなくなってきたとしても、どうぞ「日本」の皆さん、忘れないでください。利害をこえて日本との結びつきを心からのぞんでいる沖繩のことを、見捨ててくださるな。日本のほうから、声を大きくして叫んでください。その叫びを實現してくださいという悲そうなほどに切実なこの訴えを、私は、多くの人たちからききました感じと、ながらこのことを、日本の皆さんに伝えようと心にきめましたので、それを今、実行しているのです。

私は、帰るとき、八重山から那覇への船の中で、経済方面の視察をしてきた人と一しょになりましたが、その人は、沖繩の人たちがどうしてあんなに日本復帰を熱望するのだろうと疑問顔でした。琉球の現状は、日本よりもっとひどい。今一つになっても、日本にとって重荷だ。琉球でのアメリカの政策も中途半端だ。ここまで来てしまったのなら、一

そう少しアメリカに金を使ってもらって整ってからにしたらよい。これがその人の意見でした。これに近い意見をもつ人は沖繩にもいるように見受けました。基地化してしまつた現在、それを撤かいしてもらふことは無理だ。基地として使つてもいい。しかし、それならそれで、もっと生活水準を高めてくれるのでなければと、例えばこういう意見の人たちがいます。けれど、教員の多くの人たちはこういう考えに反対のようでした。

終戦後、英語熱が盛んだったそうですが、今は下火になっています。教育は、日本語でおこなわれています。教科書も日本のものを使っています。しかし、日本のことをどのように取り扱つたらよいか。本土という言葉を使、どのように理解したらよいか。日本とのつながりなしに、日本の教科書を使用しても、精神をかよわせることができない。しかし、この苦ちゅうを訴えて、それでは、琉球向の教科書をつくらう。日本のものを参考にして、琉球独自のものをつくらう。教育しようとして、こう聞きなおられることは、もつとつらく感じられる。こういう心境にある人が多いように思われました。

沖繩に生れなければよかった。これでは、日本の乞食であるほうがましだ、と、真剣に語る女教員もいたくらいです。日本から切り離されて、ほかのどの国にも属したわけではない。本当に自分たちと一つだと思えるところは、日本をおいてほかにない。良識ある人で、沖繩のことを親身に考えるなら、このように孤立しているのが、沖繩のためでないとかわかってくれるだろう。身のおき場がなく、ほかのどこにも「所属」することを許されずに、年月が過ぎれば、ますます孤立化し、植民地化してしまつて、もうその時は、日本ともびつたりは一つになれないような状況に追いこまれてしまつたらう。それでも、私たち大人なら、過去を想いおこし、日本と運命を共にした体験にもとずいて、所属感をたかめ日本と共に歩もうとするだろう。けれど、子どもたちはどうか。

過去にそうした経験をもたない。今でこそ東京にいきたい子どもたちが多いが、父母や祖父母からの影響が薄れて、東京には、電車も自動車もある、高い建物もある、いろんなものにふれることができるからと、物質文明の進んだ東京へという気持が、強くなつてくれ

ば、東京よりその意味ではもつと進んだ場所も世界にはあることですから、そちらへ向うようにもなるでしょう。そうして、自分たちから、日本を離れていくことにもなるでしょう。

沖繩の教育界では、日本でも戦後に問題となりましたが、学力低下の原因と対策について、研究をしています。全琉球教育界の研究課題として、目下研究を進めているのですが環境の不備・教員の質の低下などが、取りあげられています。しかし、私は、これについて意見を求められたとき、学力低下の大きな原因として、「所屬の不安定」をあげました。親も教師も子どもたちも、所屬の不安定な状態にあって、教育をおこなうのでは、成果が充分にあがらない。基本的な「所屬の欲求」が満たされずにおこなわれる教育は、勞多くして功少ないものでしょう。私が接し得た範圍では、日本での学力低下よりまた一段とさがっているようだから、とにかく日本の線までは高めようとする努力が、感じられましたが沖繩の特殊事情は、この努力を大きく阻むように思われます。そうして、努力してもなお隔りのあることが分かったとき、学校よりも

広い社会に、原因を求めねばならなくなるでしょう。そうして、再び沖繩の特殊事情に眼が向けられたとき、その原因を取り除いて、日本へ近づける努力がされるでしょうか。それとも、その事情を是認して、日本に近づけることをやめ、琉球独自の目標をたてて、独自の方法で、教育を進めることになるでしょうか。日本との関係が現状のままで、改善の余地がなく、日本の教科書をなお使い続けていけば、おそらく後が強くなるでしょう。

私は、七月十二日に、羽田から飛行機で那覇へ飛び、それから、宮古島を経て、八重山群島の石垣島へいきました。気象通報でおきき及びの方が多くと思いますが、測候所のある石垣島です。この島の様子や風俗その他についてはまた別の機会にお知らせすることに、ここでは、私が、幼・小・中・高の先生がたと何をしてきたか、その主なものをお話ししましょう。

大きく分けると、四つになります。その何れもが、八重山の子どもたちの幸福とつながる研究です。一つは、八重山における家庭教育の変せんと幼児発達調査でした。

家庭教育の変せんをみると、活ばつな動き

がみられせん。私たちは、その歴史を研究し、幼児発達調査を行いました。これは、日本保育学会で目下調査中のものと同じです。ねらいは、日本との比較をしてお互いに役立てることができたためでした。しかし、それよりもっと大切なねらいは、調査結果から教項をえらび出して、刷り、家庭に配布することです。混乱した時代に、教職員が横に手をつないで、積極的に家庭へ働きかける。そうした努力をしておくなら、いつか心ある人は、その意義を見いだして、明日への意欲をかりたてられるでしょう。無自覚に流された家庭教育に、積極的な働きかけの加えられることは、劃期的な意義をもっている。これは、教職員が教室で自由に発言できないからといって、無気力にならないように、一つの救いとしても役立つことになるでしょう。

第二の研究は、八重山の子どもたちの遊びの流れを明かにし、遊びによる指導を考へることです。昔のものは古老にきき、現在のものは街頭で観察したりなど、いろいろ集め、古くても新しくいかすことのできるものを明かにしていきます。この研究もまた、教師の新しい活動分野をひろげること役立つで

しょう。

第三は、問題児の指導に関するものでした。講習参加者が、それぞれの学校で問題になる子どもを書き出し、数の多いものから順に、その対策を研究していきました。

第四の研究は、学力低下の原因と対策に関するものです。

この四つの研究は、八重山の先生たちが一応まとめてくださることになっており、手許にくわしい資料がないので、報告はまたの機会にゆずります。

幼稚園関係では、園相互の連絡機関がなかったのですが、八重山保育会が誕生することになりました。(現在は、沖繩石垣市の「みやとり幼稚園」が連絡園になっていますから連絡ならそちらとお取りください。)

ほかにもまだお知らせしたいことが沢山ありますけれど、紙数の都合で割愛し、最後に、これは、或る園長からきいたのですが、一人の子どもが、旗をかきました。日の丸の旗を、と、その言いたいところですが、白地に赤い日の丸の旗ではなく、それは黒丸の旗でした。このことは、園長をひどくがっかりさせたようでした。私は、幼児の絵の特徴とし

て、色の違いはそう重大視する必要のないことを述べましたが、その園長は、幼児の生活全体からみて、憂慮すべきことと判断したのだったでしょう。

白地に黒丸の旗。これは、白地に赤い日本の旗をよく知らない沖繩の子どものかいた旗です。

日本の旗を知らない。知らない子どもたち

がいます。大人の中にも、白地に黒丸の旗を心にえがく人がだんだんにふえていくかも知れない、それを心から憂いていたのは、ずっと幼稚園教育に打ち込んできた老園長です。そして、この人は、依願退職のかたちではあつたにしろ、私が八重山でお世話になり、私が帰ってから間もなくやめられた教育長のお母さまでした。

☆新刊☆

29年度 研究集録

長い間お待ちいただいた本年度の研究集録が出来ました。本書は去る六月二、三、四の三日間の、教育実際指導研究協議会における講演研究発表、実際指導、研究討議会などの、幼稚園関係のものを全部集録したものでございます。

御入用の方は、実費送料共一部 120 円を添えて下記へお申し込み下さい。

東京都文京区大塚町三五
お茶の水女子大学附属幼稚園内
幼児教育研究会

昭和29年12月

お茶の水女子大学附属幼稚園内
幼児教育研究会